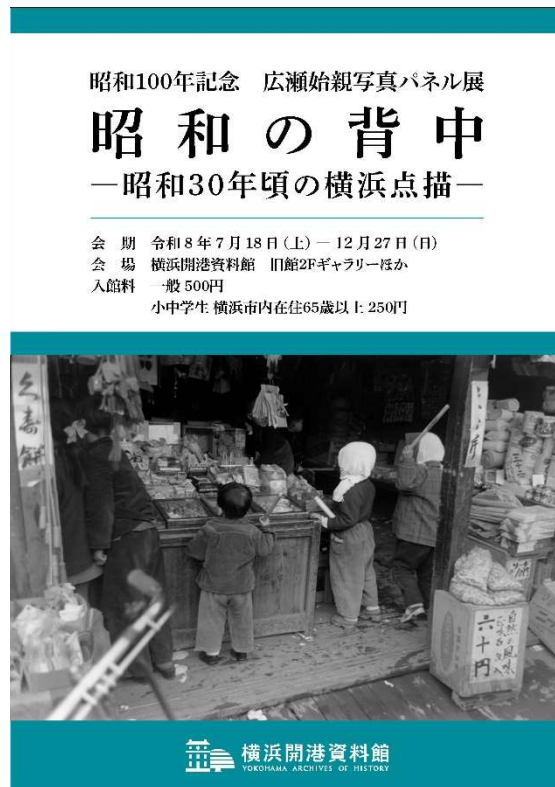


広瀬始親写真展「昭和の背中—昭和 30 年頃の横浜点描」

昭和 100 年記念パネル展示開催のお知らせ



昭和 30 年頃の横浜は、太平洋戦争の重荷を背負いながら、戦後復興へと動き始めた時期です。昭和 20 年 5 月の大空襲で大きな被害を受け、続いて連合国軍の占領により市の中心部は接收されました。一方、昭和 25 年に始まった朝鮮戦争の特需によって経済は上向き、昭和 27 年には対日講和条約がむすばれて独立を回復します。

戦争の影を色濃く残しながらも、新しい時代へと動き出した横浜。そんな街と人びとの姿をとらえたのが、広瀬始親氏です。広瀬氏はシャイな性格なのか、後ろ姿の印象的な写真が多く、その背中には当時の社会や暮らしのあり様が写し出されています。

この度、昭和 100 年を記念し「昭和の背中」と題する写真パネル展を開催いたします。広瀬写真を通して、昭和 30 年頃の横浜の街とそこに生きた人びとに思いをはせていただければ幸いです。

◆展示概要◆

- 【会 期】2026(令和8)年 7 月 18 日(土)～12 月 27 日(日)
- 【開館時間】9 時 30 分～17 時(入館は 16 時 30 分まで)
- 【会 場】横浜開港資料館 旧館 2 階ギャラリー
- 【主 催】公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団(横浜開港資料館)
- 【休 館 日】月曜日(祝日の場合は営業、翌平日が休館)
- 【入 館 料】一般 500 円、小中学生 横浜市内在住 65 歳以上 250 円



駄菓子屋来襲

昭和 31 年(1956)1 月 29 日

曙町の駄菓子屋に参上した子供たち。ソーダは 10 円、落花生は一袋 60 円。

(横浜開港資料館蔵)



広瀬始親氏が理髪店の鏡にうつった自分を撮影した一枚。昭和 28 年(1953)8 月 8 日
(横浜開港資料館蔵)

■ 広瀬始親氏プロフィール

大正 4 年(1915) 9 月甲府生まれ。東京をへて、昭和 4 年(1929)、生糸関連の貿易会社広瀬商店の開業とともに、一家で横浜に移り住む。昭和 8 年頃より写真始める。昭和 30 年前後に、横浜生糸検査所(現横浜第二合同庁舎)4 階にあった広瀬商店に勤めるかたわら、市内の情景を写真に収める。横浜の風景が急速に変化していく様を目の当たりにし、写真に残す必要性を感じたという。使用したカメラはローライコードの二眼レフ、ニコン。

広瀬始親氏は、昭和 30 年頃の横浜を撮影された 3 万コマ近くのフィルムを当館に寄贈されました。広瀬写真は、それぞれの写真の撮影場所、撮影年月日を記録されており、歴史資料としての価値が高いことも特筆されます。2007 年と 2011 年に横浜開港資料館と横浜都市発展記念館では広瀬氏の写真展を開催し、横浜の街と人びとを温かいまなざしでとらえた写真は、大きな反響を呼びました。

横浜都市発展記念館企画展「広瀬始親写真展横浜ノスタルジア」を開催(2007 年 2 月～4 月)

横浜開港資料館企画展「広瀬始親写真展 横浜ノスタルジア・特別篇」(2011 年 7 月～10 月)

横浜開港資料館パネル展「広瀬始親写真展 横浜ノスタルジア・昭和 30 年頃の街角 追悼篇」(2013 年 6 月)

お問合せ先

横浜開港資料館 TEL 045-201-2100

副館長：青木祐介 担当課長：羽毛田智幸 広報担当：加藤七海